

原 著

沖縄戦跡の「表通り」と「裏通り」 — 「沖縄戦記録／継承運動」の源流 —

北 村 毅*

要 旨

70年代初頭に立ち上がった「沖縄戦記録／継承運動」は、それまでの「軍隊本位」の沖縄戦に関する記録や語りを批判的に捉え、「住民本位」のそれに書き換えようとする運動であった。その端緒となった『沖縄県史・沖縄戦記録』は、従来の沖縄戦記録の問題点を俎上に載せて、批判的に再検討し、新たな沖縄戦記録の視座を提示した。それによって運動は、理念的・方法論的基盤を獲得し、沖縄本島南部戦跡の「裏通り」を舞台として、以後急速に展開していくこととなる。南部戦跡の「裏通り」は、60年代以降の南部戦跡の「観光化」「商業化」「靖国化」に対抗する拠点として提唱されたのである。南部戦跡の「表通り」を舞台とした、観光バスガイドによる既存の沖縄戦の語りにも抗するために、新たな語り場が求められたのであった。その「裏通り」の中心に配置されたのが、戦跡としての「ガマ」（自然洞窟）であった。ガマは、70年代半ばに、沖縄民衆の戦争の記憶が宿る場として「再発見」され、以後、沖縄戦の想起が試みられる場として展開していったのである。本稿は、戦跡としてのガマが「再発見」されるまでの歴史的経緯を分析の射程とする。

筆者は、現在、沖縄において、進行形の「沖縄戦記録／継承運動」を調査している。しかし、本稿は、その調査結果に基づいて、当該運動の「現在」を分析しようとするものではない。あくまでも本稿の射程を、当運動の草創期に絞ることにより、その理念的・方法論的源流を見定めようとするものである。いわば本論は、「沖縄戦記録／継承運動」の原点を手繰り寄せ、その「現在」の研究に礎石を築こうとする試みである。

キーワード：沖縄戦、戦争体験継承、戦争の記憶、語り、観光ガイド、慰霊、戦跡、ガマ

はじめに

筆者は、現在、沖縄において、進行形の「沖縄戦記録／継承運動」を調査している。しかし、本稿は、その調査結果に基づいて、当該運動の「現在」を分析しようとするものではない。あく

までも本稿の射程は、当該運動の草創期に絞る（つまり、歴史的研究に徹する）ことにより、その理念的・方法論的源流を見定めようとするものである。加えて、沖縄戦記録／継承運動の原点を手繰り寄せることで、その「現在」の研究に礎石を築こうとする目論見があることを、始

*早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程

めに明記してしておく必要があるだろう。

70年代初頭に立ち上がった沖繩戦記録／継承運動は、それまでの「軍隊本位」の沖繩戦記録や語りを批判的に捉え、「住民本位」のそれに書き換えようとする運動であった。それは、1971年に刊行された『沖繩県史・沖繩戦記録』によって理念的・方法論的基盤を獲得し、沖繩本島南部戦跡の「裏通り」を舞台として、以後急速に展開していくこととなる。その端緒となった『沖繩県史・沖繩戦記録』は、従来の沖繩戦記録の問題点を俎上に載せて、批判的に再検討し、新たな沖繩戦記録の視座を提示したのであり、「新しいわれらの沖繩の出発点」[宮城聡 1971: 10]となるものだったのである。

以下に示すように、沖繩戦記録／継承運動についての研究は、運動当事者によるものが大部分で、数も多くない。若干の論者の顔ぶれも、70年代以降、ほとんど変わっていないのが実状である。例えば、『争点・沖繩戦の記憶』(2002)では、沖繩戦の「記憶」「想起」「表象」をテーマとした論考が多数収録されているが、その大半が大城将保と石原昌家によって執筆されている。両者は、70年代に沖繩戦記録／継承運動が立ち上がった頃からの担い手であり、この分野は、家内工業的な研究が大勢を占めてきた。

まずは、安仁屋政昭による「沖繩戦を記録する」(1988、『事実の検証とオーラル・ヒストリー』所収)と『沖繩戦再体験』(1983)は、沖繩戦記録／継承運動の担い手としての立場から、沖繩戦記録の在り方を根元的に問い掛けている。

大城将保(筆名・嶋津与志)による以下のテキストは、本稿が最も負うところの多いものである。「沖繩戦はどう書かれたか」(1974)では、既存の沖繩戦記録における問題点が整理されている。他に、『沖繩戦を考える』(1983)、『沖繩戦 民衆の眼でとらえる「戦争」』(1985)、「沖繩戦の真実をめぐって」(2002、『争点・沖繩戦の記憶』所収)など、大城には、沖繩戦の記録と記憶を巡る研究が多々ある。どのテキストも、

沖繩戦記録／継承運動の担い手の立場から、沖繩戦を表象し想起することの困難と可能性を検討したものである。

同じく『県史』編集に携わった石原昌家による論考、「沖繩戦体験記録運動の展開と継承」(1986)も、当事者ならではの沖繩戦記録／継承運動の内情が回顧的に語られ、その概要を整然と示してくれている。

さらには、仲程昌徳が、『沖繩の戦記』(1982)において、沖繩戦記録を4つの時期区分に分類し、それぞれについて詳細に論述している。しかし、これは、沖繩戦記録／継承運動について、直接的・間接的に触れたものではなく、あくまで沖繩戦記録の諸形態を時系列的に整理した研究に留まる。

沖繩戦の記憶は、沖繩の戦後史において、常に準拠点として存在してきた。それは、本土復帰運動、反戦平和運動の渦中の中で、立ち帰るべき場所として想起され、「沖繩の戦後思想の原点」(谷川健一)として[名嘉・谷川 1971a: 179]、現在の問題と切り結ばれたのである。1978年の沖繩県平和祈念資料館の再オープンに際して、上記の沖繩戦研究者たちによって、沖繩戦記録／継承運動の理念ともいうべき、「資料館・展示のむすびのことば」が作成された。その一部を引用して、本論への導きとすることとしよう。

沖繩戦の実相にふれるたびに／戦争というものは／これほど残忍で　これほど汚辱にまみれたものはない／と思うのです／この　なまなましい体験の前では／いかなる人でも／戦争を肯定し美化することは　できないはずです／(略)／戦後このかた　私たちは／あらゆる戦争を憎み／平和な島を建設せねばと思いつづけてきました／これが／あまりにも大きすぎた代償を払って得た／ゆずることのできない／私たちの信条なのです [沖繩県生活福祉部援護課 1983: 134-5]

1. 沖縄戦記録運動前史

まずは、1960年代までの沖縄戦記録が、どのようなものであったのか、大城将保の論考に依拠して、3つの類型に整理することから始めよう。大城将保は、「沖縄戦はどう書かれたか」において、沖縄戦記録を5つの類型に分類しているが(第2類型が、さらに3つに細分化される)[大城 1974a]、ここでは「(旧軍人による)戦記」「(「沖縄人」による)手記」「(公的)戦史」の大きく3つに大別した。なお、沖縄戦記録の分類項目の後に、それぞれの類型を代表する文献例を数点付しておいた。

①旧日本軍将兵による戦闘経過中心の戦記：古川成美『沖縄の最後』(47年)・『死生の門』(49年)

沖縄戦記録の第1の類型は、1940年代後半の本土における「戦記ブーム」の一環として現れたものであり、その書き手は、沖縄戦を戦った本土出身将兵たちであった。古川成美を始めとする旧日本軍将兵によって、俯瞰的に「戦略、戦術論をもって戦闘経過をたどる」という一つの類型が登場し[大城 1974a:37]、はじめて沖縄の戦況が全国に伝えられたのである。

②「沖縄人」による手記・体験記録集：沖縄タイムス社編『鉄の暴風』(50年)、仲宗根政善編著『沖縄の悲劇』(51年)、大田昌秀・外間守善共編『沖縄健児隊』(53年)、金城和彦編『みんなの嵐のはてに』(59年)・『愛と鮮血の記録』(66年)

『鉄の暴風』は、「沖縄人」による沖縄戦記録の嚆矢たるべき存在で、第1の類型のような沖縄戦記録に異議を申し立てる形で立ち現れた。同書は、沖縄本島および周辺離島の激戦地に展開された「人間悲劇の極地」を、沖縄タイムス社の記者が体験者から取材して書き下ろしたものである。監修者の豊平良頭は、その「まえがき」において、「住民側から見た、沖縄戦の全般的な様相」を描いたことを強調し、以下のよう

に述べている。

軍の作戦上の動きを捉えるのがこの記録の目的ではない、飽くまで、住民の動きに重点をおき、沖縄住民が、この戦争において、いかに苦しんだか、また、戦争がもたらしたものは、何であつたかを、有りのまゝに、うつたえたいのである。[沖縄タイムス社編 1950:1]

特記すべきは、ここに至ってようやく、「沖縄現地で沖縄人自身の手になる客観的な戦争体験記録集」[大城 1974a:39]が編まれたということであろう。とはいえ同書は、新聞社の事業として、ジャーナリストによって編纂されたという限界もあり、事実誤認の多さ、文章表現に見られる著者の主観性、取材範囲の狭さ、実地検証の弱さなどといった数多の欠点を有している。それにも関わらず、砲弾が吹き荒れる戦場の様相を形容する印象的なタイトルと相まって、同書は「沖縄戦記の〈バイブル〉」(大城)として、沖縄戦記録に屹立することとなった。

以後、ジャーナリストの手を介さない、「沖縄人」による手記・記録が続々と刊行されることとなる。

1950年に、石野径一郎の小説『ひめゆりの塔』が出版され、53年に、今井正監督によって同小説が映画化された。そのような時代的背景の中で、ひめゆり学徒隊生存者による手記を収録した『沖縄の悲劇』が、そして、男子学徒隊(鉄血勤皇隊)生存者による手記を収録した『沖縄健児隊』が上梓された。

『沖縄健児隊』も、出版と同じ53年に同名のタイトルで、岩間鶴夫監督、沢村勉脚本で映画化され、原作者たちの意図からすれば不本意な形ではあろうが、その「殉国の物語」が広く人口に膾炙することとなった。

一方のひめゆり学徒隊においても、小説や映画などの本土のマスメディアを通して、「軍民一体の模範となって皇国に殉じた清純な乙女たち」というひめゆり神話が、全国的に広まりつ

つあった。戦中、沖縄師範学校女子部教員として、ひめゆり学徒の引率に当たった仲宗根政善が、『沖縄の悲劇』の前書きにおいて、「その事実は次第に誤り伝えられ伝説化しようとしている」と嘆いたように〔仲宗根 1951〕、すでにひめゆりの「悲劇」は、その神話性を懐胎させられていたのである。

『沖縄の悲劇』や『沖縄健児隊』の記述は、できるだけ感傷を排し、粛々と事実を伝えようとしたものだ。しかし、そのような姿勢とは対照的に、60年代に入って「祖国復帰運動」の高まりとともに、体験者による沖縄戦記録は、戦死者への感傷を前面に押し出し、戦死者の追悼と顕彰を動機として綴られていく。その典型として、金城和彦の編集による『みんなみの巖のはてに』（59年）と、『愛と鮮血の記録』（66年）が挙げられよう。それらは、「遺族の涙で綴られた記念の書」（大城）としての体裁を取ることで、自らの未必のナショナリズムを正当化したのである。

思えばわが国の都道府県で、直接戦場となり、総てを失ったのは、ひとり沖縄県だけあります。文字通り国家の防波堤になり、全国民の身代わりになった沖縄県は、尊い十幾万の英霊とともに、一木一草に至るまで国に殉じたのです。（略）この学徒たちのためにも、わが国びとは、一日も早く沖縄を日本の行政下に帰さねばならないと思います。〔金城 1966：366〕

この一文に露骨に表されているように、「祖国復帰」への切望は、まずこのような「死者の声」の中に立ち上げられた。まさにそれは、富山一郎の慧眼が見抜いたように、「〈国に殉じた〉死者たちにより構成された領土獲得運動」だったのである〔富山 1995：110〕。

③政府官公庁及び関係団体による記録・公刊戦史：防衛庁戦史室著『沖縄方面陸軍作戦』（68年）、

米陸軍省編『日米最後の戦闘：沖縄戦死闘の90日』（68年）

第3の類型の沖縄戦記録として、防衛庁戦史室による『沖縄方面陸軍作戦』と米軍公刊戦史『日米最後の戦闘』が挙げられよう。前者は、上級将校の回想（証言）と部隊の陣中日誌を基礎資料として、沖縄戦記録の中で最も権威ある専門書とされている。そこで追求されている沖縄戦の「全体像」は、あくまでも「日本軍がいかによく戦ったか」を表現するためのものであり、住民の動向と被害状況についてほとんど触れられていない。後者の米軍戦史が、「沖縄の民間人」という一節を設けているのに対して、前書においては、「沖縄の民間人」に関する記述はわずか三行と対照的である。

2. 沖縄戦記録／継承運動の原点

（1）『沖縄県史・沖縄戦記録』の方法論

そのような沖縄戦記録に対するアンチテーゼとして打ち立てられたのが、1971年6月に刊行された『沖縄県史』第9巻各論編8『沖縄戦記録1』（以下、『県史』第9巻、または、『沖縄戦記録1』と略）であった。本書は、「沖縄県民の戦争体験を、生存者多数の記憶によって記録し、まとめたもの」であり、その編集に際してはこれまでの沖縄戦記録で言及されることが少なかった、以下の点について留意したものであった。

- ①陣地構築協力、②増産諸統制ならびに抛出、③疎開、④防衛収集、⑤一般県民の戦闘中の後方任務（弾薬、食糧運び、負傷兵の看護など）、⑥壕生活（スパイ嫌疑など）、⑦友軍将兵に壕を追い出されて、⑧米軍の砲撃と死体の状況、⑨県民の生死観（人間性の喪失など）、⑩投降、⑪収容所、⑫村への復帰（遺骨収集、農作物の異常繁殖など）〔琉球政府 1971：編集趣旨ならびに凡例〕

以上の着眼点に沿って、『沖縄戦記録1』では、

体験者の証言を部落ごとにまとめ、米軍の上陸地点から、その戦闘経過を順々に辿るように南下していき、軍民共に追いつめられた沖縄本島最南端へと至るように、証言が配置されている。よって、沖縄戦の経過を、時系列的に追うことのできる構成になっている。

以上のような編集趣旨に従い、本書の証言の採録範囲は、沖縄本島中南部に限定され、それ以外の地域の証言の採録は、『県史』第10巻へと後継が託された。座談会形式で録音テープに収録された証言を文章化する作業は、名嘉正八郎、宮城聡、星雅彦に託され、書き起こした分量は、原稿用紙三千枚余りに及んだという。

名嘉正八郎は、『沖縄戦記録1』の「編集後記」において、本書の誕生の経緯を書き記している。1963年、定期的に開催された「沖縄県史編集審議会」において、名嘉の「沖縄側の広く一般庶民の戦争体験を発掘し、記録として残すべきである」という提案が受け入れられ、『県史』に2巻の『沖縄戦記録』が収録されることとなった。そこで名嘉が提唱した手法は、体験者の手記や記録を収集し収録することではなく、「座談会形式」によって採録した証言を編集することであった。その手法を選んだ理由を、名嘉は次のように書き残している。

個々人へ執筆を依頼した場合、作文になる部分があったり、その人にとって公表したくない箇所は省略したりする恐れがある。その点、座談会形式で取材すると、疑問の箇所は確かめられ、そして深めることができる。また語りたくないことも、聞き出すことが可能である。[名嘉 1971: 1070]

しかし、上の提案に対し、「内外から多くの批判が出たので一年間慎重に審議」されることになり、作業は中断した。具体的にその批判というものがどのようなものだったのか、名嘉は、『沖縄の証言(下)——庶民が語る戦争体験』の解説にこう書き記している。

疑問とされたおもな理由は、二十数年の歳月の経過によって体験者の記憶がうすれて、正しい記録は得られない、現存する記録が正しい、これに依存して編纂されるべきだ、さらに原稿応募がよくはないか、だいたいそういうことであった。[名嘉・谷川 1971b: 194]

そのような議論を経て、1969年8月、「二巻とも座談会形式により事実の再現、事実の発掘をして戦争体験を採録」する方式の採択が決定され、『沖縄戦記録1』の取材が再開され、計3年半余りの証言の採録・編集作業を経て、本土復帰を控えた1971年に刊行の運びへと至ったのである。

実際には、座談会形式だけではなく、個人面談も併用されたようであるが、集落ごとに集まってもらった体験者の証言をテープに録音して、証言記録を作成していったこの手法は、それまでにない画期的なものであった。この方式は、現在へと至る各市町村史の沖縄戦記録の多くに採択され、沖縄戦記録運動の方法論的基盤となったのである。何とかして「沖縄県民の戦争体験」記録の空白を埋めようと産み出された苦肉の策が、結果として多くの支持を集めることになった。

(2) 既存の沖縄戦記録の問題点

このような沖縄住民の証言記録が世に放たれることによって、それまでの住民不在の沖縄戦記録からは決して再現され得なかった、「沖縄戦の実相」「沖縄戦の全体像」が浮かび上がってきたのである。ここに至って初めて、「沖縄人による沖縄人のための記録」が誕生したということが出来るだろう。谷川健一が評したように、まさにこの「沖縄戦の民衆の証言」は、「戦後思想、いや戦後史そのものの書きかえを迫る」ものであった [名嘉・谷川 1971a: 179]。

続いて、本土復帰後の1974年3月に、『沖縄県史』第10巻各論編9『沖縄戦記録2』が刊行

された（以下、『県史』第10巻、または『沖縄戦記録2』と略）。『県史』第10巻は、本島北部と全離島を対象範囲として、証言が収録されている。『沖縄戦記録2』が刊行されるまで、宮古八重山地域および沖縄本島周辺離島の戦中の記録は、ほとんど残されていなかった。これによって、沖縄全域にわたる証言が集成されたといえよう。

『県史』第10巻には、安仁屋政昭が概論を付し、大城将保と石原昌家も、編集・執筆者陣に名を連ねている。以上の3者は、その後の沖縄戦研究、そして、沖縄戦記録／継承運動の中心的な担い手となった。その執筆（証言の採録・文章化）には、歴史教育者協議会、沖縄歴史研究会の会員を中心とした沖縄戦研究者が当たり、その編集作業は、沖縄県教育委員会沖縄史料編集所が担当した。

安仁屋政昭は、『県史』編集の最大の眼目になったことは、「既刊の戦記物の批判的検討」であったと、第10巻の附論に書き記している。安仁屋の記述に従って、それ以前の沖縄戦記録の問題点を整理すると以下の通りになる〔安仁屋1974a：1096-1102〕。

〈問題点1〉：「日米の軍事行動の記録が主流になっていて、戦禍のなかでの庶民の言語に絶する体験については、軍事行動を説明する材料の一部としてつけ足し程度にしか書かれていない」

それまでの沖縄戦記録の多くが、軍隊本位、戦闘中心の記述を中心に構成され、一般住民についての記述を欠落または軽視させてきた。先に見た沖縄戦記録の分類①や③に顕著に見られる傾向である。

〈問題点2〉：「これまでの記録のほとんどが、いわゆる砲煙弾雨のなかの戦争体験に限定されている。（略）戦争における庶民生活の諸相を具体的に記録すべきではないだろうか」

このことは、前出の沖縄戦記録の分類すべて

に当てはまることで、人々の耳目が、沖縄本島中南部の激戦地ばかりに集中してきた弊害が問われている。そのような偏向によって、他地域の戦時被害はほとんど問われることがなく、食糧難、疎開・マラリアによる犠牲、根こそぎ動員、強制連行朝鮮人など、沖縄戦の様々な諸相が見過ごされてきたのである。

〈問題点3〉：「庶民の戦争体験に照らしてみると、これまでの戦記物の記述は、きわめて不正確なものが多い」

それまでの戦争記録には、軍隊本位の価値観が優先し、実証的な調査が不足している上に、さらには安直な引用が繰り返されるため、事実関係が極めて不正確なものが多かったのである。

〈問題点4〉：「沖縄県民の犠牲を、「殉国の美談」として描いている」

それまでの沖縄戦記録は、戦場の悲惨な体験を隠蔽し、殉国美談や戦場ロマンに脚色して描くことによって、戦争そのものを美化する傾向が強かった。例えば、防衛庁戦史室による『沖縄方面陸軍作戦』は、座間味村及び渡嘉敷村の「集団自決」について、「戦闘員の煩累を絶つため崇高な犠牲的精神により自らの生命を絶つ者も生じた」と記述している〔防衛庁戦史室1968：252〕。

『県史』以後、沖縄戦記録・研究は新段階に入り、上記の問題点を踏まえ、以下の沖縄戦の「位置付け」と「特徴」が十全に理解されることが求められるようになった。逆言すれば、上記の問題点に抵触している沖縄戦記録や語りは、「沖縄戦の実相」「沖縄戦の全体像」を表していないとされ、論駁の対象となったのである。

大城将保は、『沖縄戦を考える』において、「沖縄戦の位置付け」を「十五年戦争の最終段階としての日米両軍の最後の作戦」とし、「沖縄戦の特徴」を以下のように整理している〔大城1983：87〕。

①長期にわたる激しい国内地上戦 ②現地自給総動員作戦 ③軍民混在の戦場行動 ④正規軍人を上まわる住民犠牲 ⑤米軍による軍事占領の長期化

そのすべてについて詳細に論述する紙幅の余裕はないが、『県史』は、まさに上記の視座に立脚して打ち立てられた、沖縄戦記録の新機軸であった。「住民」「庶民」「民衆」の視点から再現された沖縄戦は、従来の沖縄戦像に書き換えを迫り、以後、沖縄戦記録運動の波が、各市町村史に急速に広がっていくこととなった。

続いて『那覇市史』資料編第2巻中の6『戦時記録』(74年)¹、さらに、『宜野湾市史』(82年)では、研究者と市民が協同して聞き取り調査を実施するという手法が選ばれ、沖縄戦記録運動が全県的に展開していくこととなる。以後現在に至るまで、多くの市町村史・字史に、地域住民による沖縄戦の証言集が収録され、個人レベルでも、「庶民」の沖縄戦記録が数多く出版される状況が続いている。その後の展開については後論に託したいが、そのような一連の運動の原点に『県史』が屹立しているのである。

『県史』は、理念的にも、方法論的にも、以後の沖縄戦記録運動の礎となった。しかし、「その作業はようやくスタートラインについたばかり」であり[安仁屋1974a:1102]、ここにして始めて、「最大の被害者となった住民の目についた沖縄戦、これを丹念に集めて沖縄戦の全体像を客観的に立体的に構築する作業」の端緒が開かれたのである[安仁屋1988:59]。

やがて、そのような沖縄戦記録運動の源流が、「沖縄戦の実相」を語り伝えようとする沖縄戦継承運動の奔流に流れ込んでいったのだが、その契機として一つの問題提起が挙げられよう。

それは、本島南部戦跡を巡る観光バスに対するものであった。南部戦跡において、バスガイドによって語られる話の内容が、問題であるとして俎上に上ったのである。では、一体、戦跡観光バスガイドのどのような点が問題とされた

のだろうか。

中山良彦は、雑誌『青い海』の1977年5月号において、南部戦跡巡りのバスに乗った、本土から来た友人の談話を紹介している。

出てくるのは戦況の推移や、旧日本軍の勇戦振り、将軍の美談、戦場の悲劇といった類いばかりでした。沖縄住民は消えてしまっている。(略)まるで戦争をロマン化する観点だ、と思いました。さながら琵琶法師の語る“平家物語”です。[中山1977:107]

まさに、バスガイドたちは、「沖縄戦の琵琶法師」として、南部戦跡を巡り沖縄戦を講釈した。そこでは、沖縄住民に対する、旧日本兵による食料強奪や虐殺行為、「集団自決」の強要などについて、語られることが全くなかった。「沖縄戦の琵琶法師」が語るのは、神話と化した「ひめゆりの乙女たち」の「殉国の美談」であり、日本軍将兵たちの「勇戦敢闘の偉勲」であった。

このような沖縄戦記録の在り方が、上記の沖縄戦記録の問題点すべてに抵触するものであり、「沖縄戦の実相」からは懸け離れたものであるとして、1970年代前半に異議申し立てがなされた。沖縄戦研究者たちは、そのようなバスガイドの語りの内容と声の調子に、「英霊顕彰」と「軍国賛美」の思想が充溢していると指摘し、そこから新たな戦跡ガイドコースの模索が始まる。沖縄戦継承運動は、南部戦跡バスガイドへのクレームと共に立ち上がったのである。

それではなぜ、バスガイドたちは、そのような軍記物語を語らなければいけなかったのか、次節において詳細に検討していくこととしたい。

3. 南部戦跡の「靖国化」

(1) 戦跡観光のはじまり

1966年から68年にかけて約3年間、沖縄バスで南部戦跡観光バスのガイドをしていた糸数慶子(現沖縄県議会議員)は、当時を次のように

振り返っている。

沖縄にやってくる観光客の大半が慰霊墓参団だったので、皆さんの家族は本当に沖縄で勇氣のある戦いをして亡くなったんだという軍人賛美の立場に立った案内がほとんどだったんです。[糸数 1998 : 10]

そのガイドの対象のほとんどが、他県から来た沖縄戦戦死者の遺族と戦友であったため、そのシナリオは、あくまでも旧日本軍の「勇戦敢闘」を賞賛するものであることを求められたのである。ガイドたちは、戦跡の「表通りの観光コース」[大城 1974b]に沿って、英霊讃美、殉国讃美の語りを量産し続けた。80年代、沖縄戦記録／継承運動が高まりと共に、糸数は、そのような在り方に疑問を持ち、南部戦跡バスガイドに「裏ガイドコース」(糸数)を導入する先駆者になるのだが、60年代当時は、そのような観光バスガイドの在り方に誰も注目を寄せなかったし、疑問を持つ者もいなかった。

それでは、慰霊観光客たちが辿った「表通りの戦跡観光コース」とはどのようなものであったのだろうか。慰霊や戦跡観光に対して、どのような人々の思惑が、そして時代の要請があったのであろうか。まずは、慰霊観光・戦跡観光を巡る時代の流れを順に追っていくこととしたい。

最初の慰霊団の来訪は、北海道からであった。1954年4月、北海道より第1回派遣遺族団一行22人が、戦後初めて来沖した²。言うまでもなく当時沖縄は、米軍の施政権下にあったため、本土からの慰霊巡拝の実現には幾多の困難があり、現地での行動も米側の厳しい監視の中で許されたものだった。翌年の第2回慰霊団に参加した高山金作は、後年、当時の南部戦跡の様子を次のように回想している。

当時は一面草ボウボウ。目につくのは所々に集められたゴボウ剣、鉄かぶと、飯ごう、軍靴の底などの残骸だけでした。[北海タイムス

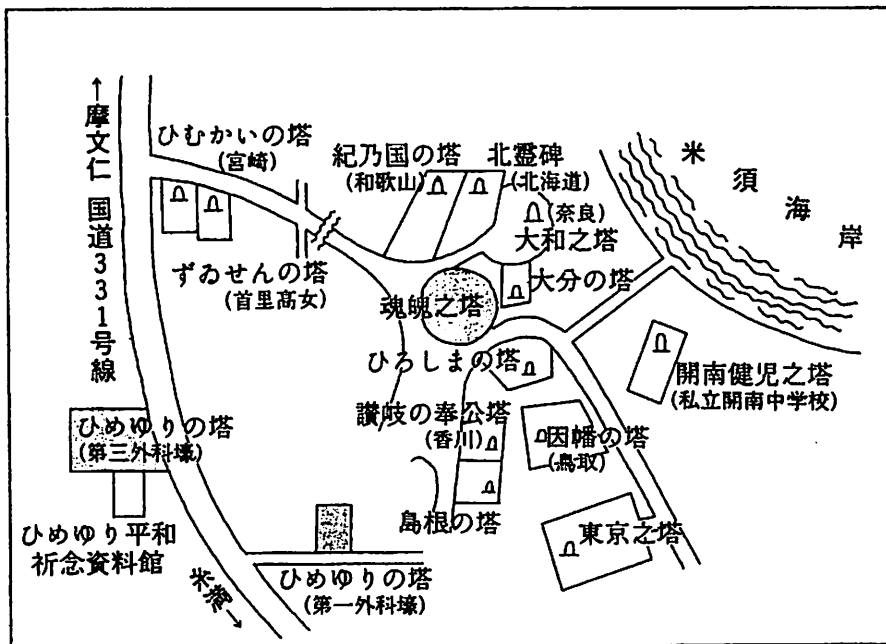


図1 米須霊域の慰霊塔・碑 [大城 1997 : 141]

1983. 7. 14]

そのような荒れ果てた南部の糸満市字米須の一角に、他都道府県としては、北海道が初めて慰霊碑を建立した³。札幌彰徳神社（現在の札幌護国神社）の境内を流れる小川に落ちていた3つの丸石（御影石）が加工され、それぞれに「北」「霊」「碑」の文字が刻み込まれ、縦に積み重ねられた。同年3月、札幌彰徳神社にて「入魂式」が行われ、碑は慰霊団と共に沖縄へと運ばれ、現地の遺族会や三和村民の協力によって建立された。そして、第1回の慰霊団によって、他都道府県民による戦後初めての慰霊塔・碑の除幕式と慰霊祭が執り行われたのである。

現在、その北霊碑と向かい合う位置に、魂魄の塔が建っている。今では、「米須霊域」と呼ばれる北霊碑と魂魄の塔がある一帯は、多くの慰霊塔が建ち並ぶが(図1は、現在の「米須霊域」)、当時は、両塔の他はほとんど見当たらない閑散とした辺境の地であった。

魂魄の塔は、1946年2月、金城和信村長以下、

真和志村民の手によって建てられた。戦後初めての沖縄住民による慰霊塔・碑である。1979年に、摩文仁の国立沖縄戦没者墓苑に遺骨が転骨させられるまで、塔内部の納骨所には、4万に近い遺骨が納められていたという（現在は、象徴骨を残すのみ）。円形の石積みが二段に重なり、その頂には、「魂魄」の2文字を刻んだ珊瑚石が、蕭々と置かれている。煌びやかな美辞麗句に彩られる他都道府県の慰霊塔・碑に比べ、あまりに寡黙であり、県民の閑かな鎮魂の思いが湛えられている。

そのような同塔は、戦場で行方不明となった家族の姿を追い求めて、多数の遺族が訪れる場となり、いつの間にか「沖縄県民の塔」としての位置を与えられるようになっていった。全都道府県中、唯一沖縄県の慰霊塔・碑のみが存在しないのだが、同塔は、実質的な沖縄県の塔として、県民の間に親しまれ続けてきたのである。建立以来、そこは、沖縄県民の慰霊の場として、沖縄県遺族の精神的支柱として、南部戦跡の中

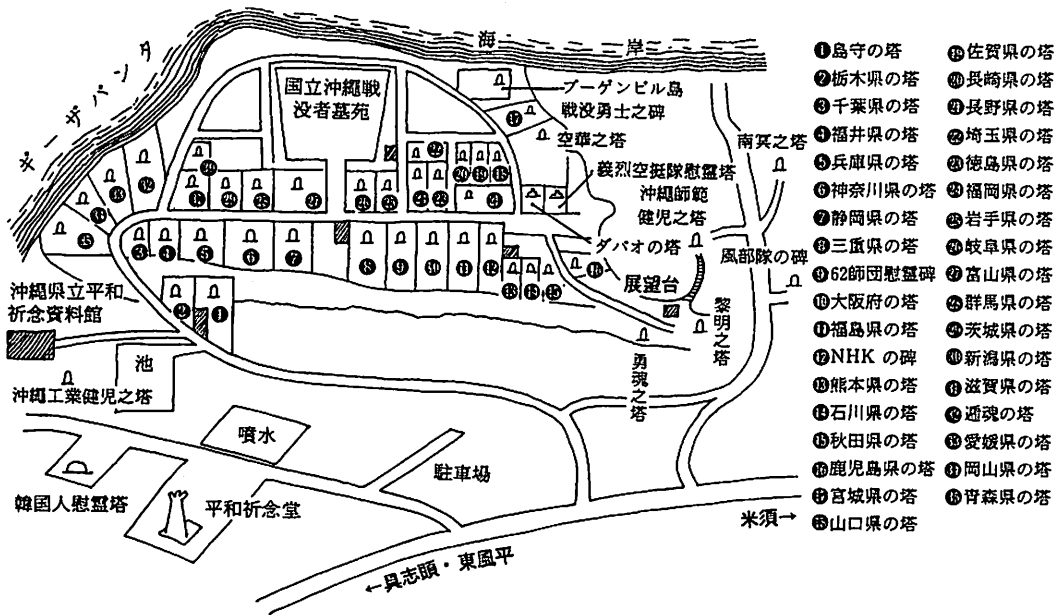


図2 摩文仁の丘の慰霊塔・碑 [大城 1997 : 119]

心に存立していた。しかし、60年代に入って、その確たる位置に変化が生じることとなる。

(2) 霊域整備事業

1962年度より、南方同胞援護会（現沖縄協会）⁴によって、「霊域整備事業」が実施されることになった。それを受けて、日本政府の国庫補助金により、南部戦跡の慰霊塔・碑が、改修され、建て替えられ、新たに建立されたのである。同年、当事業に基づいて真っ先に、第32軍司令官を祀った「黎明の塔」が改修され、雨宮巽中将以下500名の日本兵を合祀する「山雨の塔」が新たに建立された。以後10年余りの間に、13基の慰霊塔・碑が、改修・建て替え・新規建立されたのである。さらに、沖縄戦没者慰霊奉賛会⁵を通して、県内8ヶ所の慰霊塔・碑に給水施設が設けられた〔沖縄協会 1973：110-112〕。

戦後、南部戦跡一帯に散在する遺骨を収集し、私費を投じて慰霊塔・碑を建て、そこに納骨したのは、地元の住民たちであった。彼らによって、慰霊塔・碑は、日々手厚い保護を受け、慰霊祭が執り行われた。しかし、「霊域整備事業」が進展していくにつれ、そのような草の根の慰霊塔・碑やその維持管理が、漸次国家の管轄の下に移行していくこととなる。その傾向は、復帰が近づくにつれ、ますます顕著になっていった。

1964年度より、上記の沖縄戦没者慰霊奉賛会に、南方同胞援護会を通して国庫補助金が助成されるようになり、指定霊域（慰霊塔）43ヶ所の清掃管理が委託されるようになった。指定霊域は、年々拡大の一途を辿り、65年には64ヶ所、68年には84ヶ所を数えることとなる⁶〔沖縄県戦没者慰霊奉賛会 1990：3〕。

1965年、沖縄本島最南端喜屋武半島一帯が「沖縄戦跡琉球政府立公園」に制定された。そのような中、黎明の塔の元に旗下が参集するかのごとく、摩文仁の丘に、続々と各都道府県の慰霊塔が建立されていったのである。65年を挟んで、前後3年の間に、全都道府県の3分の2にあたる31府県が慰霊塔・碑建設を行っている（その内25府県が摩文仁に建立）。表1を見てもらえれば分かるように、ほとんどの都道府県が60年代に慰霊塔を建立し、新潟県を除いた45都道府県が、本土復帰前に慰霊塔の建立を終えている。ここに至って、摩文仁の丘は「慰霊塔の団地」と化し、地域住民の厚意で行われていた霊域の清掃管理は、公的管理の下に置かれるようになっていった（図2参照）。

このような状況の中で、ますます多くの慰霊巡拝団が、南部戦跡を訪れるようになっていった。荒れ果てていた摩文仁の丘は、たちまちのうちに整備され、管理下に置かれ、慰霊観光客

表1 各都道府県慰霊塔・碑の建立年別一覧

(註) 太字は、摩文仁の丘所在の塔

建立年	建立総数	慰霊塔・碑を建立した都道府県
1954年	1	北海道
1961年	1	和歌山
1962年	3	秋田 石川 愛媛
1963年	2	熊本 群馬
1964年	7	青森 茨城 長野 滋賀 鹿児島 兵庫 京都
1965年	11	千葉 神奈川 富山 愛知 三重 大阪 岡山 徳島 大分 宮崎 山形
1966年	13	岩手 福島 栃木 埼玉 福井 長崎 岐阜 静岡 山口 佐賀 福岡 高知 山梨
1967年	1	奈良
1968年	3	宮城 広島 香川
1969年	1	島根
1971年	2	鳥取 東京
1976年	1	新潟

* 沖縄県生活福祉部援護課「各都道府県慰霊碑の建立状況」より作成〔沖縄県遺族連合会 1982：247〕

を迎えるための「霊域」としての様相を整えていったのである。さらに、日本政府の資金援助で摩文仁に平和祈念公園が整備されていくに従って、米須一帯はすっかり影が薄くなり、戦跡の中心地としての座を奪われることとなった。南部戦跡の中心は、魂魄の塔から黎明の塔に移ってしまったのである。後年、大城将保（を始めとした沖縄戦研究者ら）は、そのような一連の現象を「住民本位の戦跡から軍人本位の霊域への塗り替え」として、「沖縄戦跡の靖国化」と呼んだ [大城 1985b: 212]。

70年代末、「沖縄戦跡の靖国化」を露呈しているものとして、各都道府県の慰霊塔・碑の碑文に対する批判の声が挙がった（「碑文問題」）。140の慰霊塔の碑文を調査した、「靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会」による報告書『戦争賛美に異議あり！』によれば、1960年代に建てられた73基の慰霊塔の約57%が他都道府県のものであり（42基）、その中で32都道府県の碑文が「戦争戦死の肯定讃美」「愛国憂国の心情」を含んでいるという。それ以外の30基の慰霊塔においても、「戦争戦死の肯定美化調」を含むものが20基あり、その大部分は、軍関係戦没者のために「沖縄遺族連合会」によって建立されたものであった⁷。

それに比して、40年代から50年代に建てられた慰霊塔の多くは、地元沖縄の手によるものであり、碑文がないか、または単に事実経過を記したものとどまる。60年代より以前の慰霊塔には、「戦争美化」の傾向は、ほとんど見られないと報告されている [靖国神社国営化反対沖縄キリスト者連絡会 1983: 5]。碑文を検討することからも、各県慰霊塔の乱立が繰り返された60年代に「沖縄戦跡の靖国化」が急激に進行したことが理解できるのである。

ここでは紙幅の都合もあり、多くの事例は紹介できないが、その具体的一例として、「平和の塔」の変化を取り上げたい。平和の塔は、元々、地元住民が辺り一帯に散乱した遺骨を収集して、部落沿いに建立した納骨堂であった。1969年、

「霊域整備事業」の一環として、平和の塔が、喜屋武部落の海岸付近より喜屋武岬の崖の上に移築され、そこに沖縄遺族連合会の署名で以下のような碑文が刻み込まれた。

第六二師団管下部隊は喜屋武複廓陣地において摩文仁の第三二軍司令部向け進攻を続ける米軍に対し最後の迎撃を続けしが善戦空しく昭和二十年六月二十日玉砕せり 昭和二七年十月地元民は將兵並びに戦闘に協力散華せる住民の遺骨併せて一万柱を奉納し平和の塔と名づけしがこのたび南方同胞援護会の助成を得て新たに塔を建てその偉烈を伝う。

住民を主体とした無名の遺骨が収骨された納骨堂が、なぜか旧日本兵（と住民）の「散華」を記念する慰霊塔へとすり替えられてしまったのである。第62師団の慰霊碑は、すでに1963年に、石部隊（第62師団）の戦友会によって摩文仁に建立されており、新たにその「偉烈」を刻む必要もなかった。このような碑文を刻むに至った経緯には、南方同胞援護会や沖縄遺族連合会の意向が働いていたことは明らかである。

（3）戦跡・慰霊の「本土化」

1960年代、地元住民の血の通った各部落の納骨所としての慰霊塔・碑から遺骨を抜き取り、那覇市識名にあった中央納骨所へと移骨するという作業が急ピッチで進められた。『還らぬ人とともに』によれば、「沖縄の人々は、自分のお墓はブロック造りで大へん立派に建てるが、戦没者を祀る納骨所は、お粗末である」という本土遺族等の苦言に対して、1963年3月、当時の那覇日本政府南方連絡事務所（当時は総理府の付属機関、現内閣府沖縄総合事務局、以下南連と略）、琉球政府（援護課）、沖縄遺族連合会の3者間で、懇談会がもたれることとなった。その場で、遺骨収集、塔納骨所の管理、霊域の整備などについて協議され、特に「納骨所の管理運営」については下記事項が決定された [沖縄

県遺族連合会 1982:211-219]。

①納骨所は現在二二四ヶ所で管理面も不十分であり、将来は年次計画で整理統合、整備の必要がある。

②各市町村及部落の納骨所は、中央納骨所へ移骨整理統合する。

それに対して、南連は、日本政府からの資金援助の増額を了承し、南連と琉球政府(援護課)による具体的な実施計画の下で、霊域整備事業が実施された。この計画によって、86ヶ所の納骨所から、遺骨が焼骨の上、中央納骨所へ転骨された⁸。その中には、前述の「平和の塔」も含まれている。1969年、「沖繩返還」までの具体的日程が決まってからは、平和祈念公園の造成と共に、その作業は急ぎ進められた。さらに、1979年、中央納骨所が手狭になったため、厚生省は、摩文仁の丘に「国立沖繩戦没者墓苑」を建設し、中央納骨所から遺骨を転骨され、ここに「無名戦没者」の国家への取り込みが完成する⁹。

国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑における遺骨が、「国に殉じた戦没者のもので、その縁者は国家であり、国家が責任をもってお守りすべきもの」と理解されるように[千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会1989:8-9]、国家の管理の下に一元化された「無名戦没者」は、国家の名の元に「有名性」を与えられ、国家との紐帯を保障された上で収骨されるのである。

以上のように、一連の「霊域整備事業」は、慰霊事業の中央集権化であったと総括することができよう。「無名戦没者」の遺骨は一所に集められ、一極管理されることとなった。復帰に向けて、各領域で本土系列化が進行する中、遺骨や慰霊、慰霊碑や戦跡も、本土への取り込みを余儀なくされた。様々な位相で、本土の求めるままに、沖繩は「本土化」されていったのである。

そのような時代風潮の中で、南部戦跡観光バスガイドは、ひめゆりの塔や、黎明の塔に代表

される摩文仁の丘を巡り、「英霊の安らかならんことを祈りながら」、時に軍歌を歌いつつ、与えられたシナリオに沿って語り続けるしかなかった。全国津々浦々まで行き渡った「ひめゆりの乙女たち」や沖繩健児隊の「殉国」を物語り、遺族や戦友に対して日本軍の勇ましい闘い振りを誉め讃えたことは、客のニーズに応えるという点で必然だったのかもしれない。そこでは、『県史・沖繩戦記録』によって提示された、「〈人間が人間でなくなる〉戦場の極限状況や、軍隊と住民との骨肉あいはむ地獄図絵」[大城1985b:213]など語られるべくもなかったのである。

4. 南部戦跡の「表通り」

(1) バスガイド・コンクール

ここでは、本土復帰前後までの南部戦跡観光バスガイドの語りの実際が、どのようなものであったのか、検証を試みたい。この節は、南部戦跡の「裏通り」についての検証に移る前に、当時の南部戦跡の「表通り」における語りの実際を、再現しようとする試みである。

1957年6月22日、沖繩観光協会の主催で「第2回全琉バスガイドコンクール」が催された。当コンクールは、前年より、バスガイドの「品位、説明技術の向上、車内サービスの改善」のために始められた。「規格化された機械的なバス・ガイド調」の弊害を排し、「ウイット、融通のきく、巾(原文ママ)の広いガイドの要請」を目指して[沖繩観光協会1964:33]、各バス会社のバスガイド22名が、那覇のグランド・オリオン劇場に一堂に集い、「その自慢のノドや技術」を競い合ったのである。

その模様が、翌日の『琉球新報』で報告されている[琉球新報1957.6.22]。記事の著者は、同コンクールに参加したバスガイドの演技を「悲壮感にあふれて、なかなかその技術も相当の水準に達して」と評価する一方で、その「演技過剰のアクション」がバスの中で実演可能

なのかと疑問を呈している。さらに、その「新派調の芝居がかかったセリフまわし」や、「映画説明調じみた」演技に対する懸念を記し、特に南部戦跡巡りのバスガイドに対して、次のような批判的なコメントを寄せた。

「いかにも大げさな悲劇調の芝居じみたセリフまわしでこれでもかこれでもかと泣かせようとしているみたいであった」

前出の「沖縄戦の琵琶法師」という言葉を、まさに彷彿させるものがある。すでに、後年へと受け継がれる、南部戦跡観光バスガイドのシナリオが出来上がっていたことが推察されよう。それでは、そのシナリオの内容は、具体的にどのようなものだったのであろうか。

同記事において、『沖縄観光案内』という旅行ガイドブックが、バスガイドの「ネタ本」として挙げられている。各バス会社は、その「ネタ本」を元に、若干の「内容の色づけや肉づけをして脚色」を施し、バスガイドのシナリオとして配布していたようである。

コンクールが催される数ヶ月前に、バスガイドの「ネタ本」と思われる本が、沖縄観光協会より刊行されている。『新沖縄案内 1957年度版』である¹⁰。そこに、沖縄観光協会専務理事(当時)、与那国善三による巻頭言が付されている。それによれば、同書は、与那国自身が、1956年10月から12月までの3ヶ月間、バスガイド講習会で講義をした資料をまとめたものであり、「各バス会社では、これを基礎に思い思いの肉をつけて、バス会社独特の説明をしています」とある。よって、『琉球新報』の前掲記事で触れられていた『沖縄観光案内』の後継書(あるいは類書)である可能性が高い。

それでは、同書の内容を見ていくこととしよう。そこには、南部の観光ポイントとして、以下の戦跡が挙げられており、それぞれに詳細な解説が書き添えられている。「バクナー中将戦士の碑、栄里の塔、白梅塔、姫百合の塔、戦歿医

療人之碑、和光地藏尊、魂魄之塔、北霊之碑、黎明の塔、健児の塔、健児隊の像、島守之塔、万華塔」

1950年代後半、各都道府県の慰霊塔・碑は、北海道遺族団による「北霊碑」を除いて、未だ建立されていなかった。その南部戦跡観光コースの中心に配置されたのが、「ひめゆりの塔」と「黎明の塔」であった¹¹。

ひめゆりの塔は、1946年、当時真和志村の村長であった金城和信を中心とした真和志村民によって、糸満市字伊原に建立された。同塔には、沖縄戦で戦死した沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒211人、職員16人が合祀されており、南部戦跡観光コースには欠かせない。1953年1月本土において、映画「ひめゆりの塔」(東横、現在の東映)が公開されるやいなや¹²、ひめゆり学徒隊の悲劇の物語は、遍く全国に知れ渡ることとなった。『新沖縄案内』においても、ひめゆりの「乙女」たちが最期を遂げるまでの経緯が切々と書き連ねられている。

全国区と化した「殉国の乙女たち」の物語は、南部戦跡観光の中心に据えられた。戦跡巡りのバスは、ひめゆりの塔に必ず立ち寄り、バスガイドは、そこで涙ながらに「乙女たち」の悲劇を語ったのである。そして、次に摩文仁の丘の黎明の塔に場所を移して、「英雄」たちの「壮絶なる」最期を、まるで看取ったかのように切々と講釈した。

黎明の塔は、そこで自決した、第32軍の司令官牛島満司令官と長勇参謀長が祀られている。第32軍司令部最期の地となった摩文仁の丘の頂に、1952年、その部下らによって建立された。塔は、牛島の切腹の形容を模したとされ、吉田茂の揮毫による題字(碑銘)が刻み込まれている。丘の頂点に従容と屹立している様は、まるで各県の慰霊塔・碑を配下に従えるかのようだ¹³。塔の手前には両将軍の「首塚」もあり、塔の足下の断崖の中腹には、かつての司令部壕が鉄格子に閉ざされた入口を晒す。さらに、海側にある長い石段を下っていくと、「沖縄師範健児

之塔」(1946年建立)があり、観光客は、男子学徒たちの「殉国」の物語に涙したのである[沖縄県生活福祉部援護課 1998]。

(2) バスガイドの語りの実際

『琉球新報』の前掲記事において、「大ゲサな悲劇調の芝居じみた」と揶揄された当時のバスガイドの「セリフまわし」がどのようなものであったのか、『新沖縄案内』の「黎明の塔」についての記述から想像できる。牛島と長が、「古武士の式」に則って自決へと至る様子が、両者の「時世の歌」と共に、子細に綴られている。

時は丁度二十三日午前四時三十分で、白々と明けゆく南海の空を仰ぎつつ、長恨の涙をのんで泰然自若、古武士の式によつて自決したのであります。／見渡すと南冥はあくまで青く、寄せては返す白波は、ちょうど両將軍の魂を呼び招くようでありました。[沖縄県観光協会 1957: 57-59]

まさにその「セリフ回し」は、英雄譚や武勲を語り挙げる軍記物、浪曲などの特徴を模した表現が試みられるものであった。バスガイドたちは、ひめゆりの乙女たちの殉国の物語や小西郷と謳われた「英雄」の末期を、筋書き通りに語りあげたのである。

それではここで、1971年当時のバスガイドのシナリオ¹⁴を見てみることにしよう。バスガイドたちは、各バス会社のシナリオに基づいて、以下のような文句を丸暗記し、各観光地を案内した。例えば、黎明の塔の前で、牛島と長の切腹の模様は、次のように語られた。

月まさに南海に没しようとする頃、塚外の断崖の上に敷いてある白布の布団にすわり、まず長参謀長が、閣下、ではお先にと挨拶して、愛刀を腹にたてた。つづいて牛島司令官も名刀で腹十文字にかっさばいた。「えい!!」と坂口大尉が介錯の刀をふった。時まさに午

前四時三〇分、両將軍とも、古武士の型にならった見事な最後(原文ママ)だったと伝えられています。両將軍の自決とともに沖縄戦も終えました。

『新沖縄案内』というネタ本に、どのような「思い思いの肉」がつけられたのか、想像できよう。南部戦跡のクライマックスたる黎明の塔で語られる牛島の、そして「沖縄守備軍」の「悲劇」は、他にも様々なエピソードに飾られて、「英雄」の「古武士の型にならった見事な最後(原文ママ)」として、目の前に再演された。そして、観光客たちは、「英雄」の切腹によって沖縄戦が大団円を迎えたように納得して¹⁵、次の観光ポイントへと向かったのである。

本土復帰後になるが、そのような南部戦跡観光バスに乗った体験が報告されている。1974年6月25日の『琉球新報』の記事において、嶋津与志(大城将保)は、「わが沖縄はどのように自らの戦争体験を語り伝えているのだろうか」と問い掛けた上で、南部戦跡を巡る観光バスに乗った体験を報告した。大城はそこで、南部戦跡観光バスが巡るコースを「表通りの観光コース」と呼んで、その実態に対して異議を申し立てた(その抗議行動の展開に関しては、次節にて詳述する)。

両將軍は白々と明けゆく南海の空を仰ぎつつ、恨みの涙をのんで、泰然自若として古武士の式にならつて自決したのでございます。…英霊のみたまの安らかであることを祈りながら、皆様とご一緒に“海ゆかば”を歌ってまいりたいと思います。

このように復帰後も、その語りの内容と調子に大きな変化は見られなかった。1957年と1974年を比べてみても、以前のテキストが変わりなく踏襲されていることが分かるだろう。

以上のように、バスガイドによる語りは、第二節で検討した「一般住民の視点」からは懸け

離れた内容だった。本土からの慰霊墓参団に、沖縄戦戦死者が「見事な最期を遂げた、と納得して帰ってもらう」¹⁶ためのガイドにおいて、旧日本軍による沖縄住民に対する残虐行為などについて語られるはずもなかったのである。

そのようなバスガイドの在り方に対して、70年代前半、沖縄戦記録運動の形成に伴って、「沖縄戦の実相」から懸け離れているというクレームが発せられた。それはやがて大きな流れとなって、沖縄戦継承運動という奔流に流れ込み、南部戦跡の「裏通り」を発掘し、現在の「平和ガイド」の活動を誕生させる源流となったのである。

5. 南部戦跡の「裏通り」

(1) 歴史教育者協議会沖縄大会

それでは、そのようなバスガイドの語りに対するクレームは、どのような経緯を経て立ち上がったのであろうか？ それは、歴史教育者協議会の大会が沖縄で開催されたことを契機として、初めて問題の俎上に載せられたのである。当節では、「沖縄戦継承運動」の流れの中で、「南部戦跡の裏通り」が提唱されるに至った経緯を辿ってみることにしたい。

1972年7月30日から8月2日に掛けて、歴史教育者協議会第24回大会が沖縄県で開催されることとなった。沖縄は、同年5月15日に「本土復帰」を果たしたばかりであり、「反戦平和の聖地」としての熱気に溢れていた頃だった。大会テーマを「民族の課題」とし、「本土は沖縄県に、沖縄県は本土に学び、それぞれの戦いを一体化し、日本の歴史教育運動の発展に寄与する」と位置付けるものであった〔歴史教育者協議会編 1972c：224〕。

受け入れ側の沖縄歴教協によって、「沖縄戦における庶民の苦しみの諸相、軍事基地の実態、公害企業の進出状況等」を見学するフィールドワークが企画された〔歴史教育者協議会編 1972a：70-71〕。企画に際して、「南部戦跡の観

光バスガイドに任せられるか否か」が議論され、沖縄の研究者たちは実際に観光バスに乗って、語られている内容を確かめてみることにしたのである。その実態は驚くべきものだった。その沖縄戦や沖縄の文化に関する説明に、多くの問題点や誤りが含まれていたのである。結果、『県史』の執筆・編集に携わる沖縄戦研究者を中心とした「にわか体制」で、バスガイドの代わりに勤めることになった〔石原 1986：264〕。

現在の「平和ガイド」活動の原点たる、この「にわか体制」が、あくまでも観光バスガイドに対するアンチテーゼとして、打ち立てられたことを特記しておく必要があるだろう。

そのような裏事情を経て、大会初日の7月30日に、全国から集まった約800人の参加者が12台のバスに分乗して、沖縄本島の中部基地と首里・南部戦跡のフィールドワークが実施された。

「歴教協」の機関誌『歴史地理教育』（同年10月号）に、参加者の「沖縄大会参加記」が寄せられている。北海道から、フィールドワークに参加した宮川嘉明は、各県の慰霊塔が林立する摩文仁の丘を「あまりにも観光化、商業化が目立つ」と批判的に捉え、「戦争体験、反戦平和の思想が風化しかかっていた。むしろ、慰霊碑は“戦争賛美”の記念碑にされていた」との感想を残している。愛媛県より参加した井上啓も、他の参加者の談話として、「〈健児の塔〉〈黎明の塔〉等が、観光化され、沖縄戦の犠牲が軍国主義復活の思想動員の武器として利用」されていることに対する危機感を書き記している〔歴史教育者協議会編 1972b：74-87〕。

しかし、この時はまだ、南部戦跡観光バスと同じコースを回った。企画した沖縄歴教協側の意図としては、南部戦跡の「表通り」を巡ることによって、「靖国化」が進行している南部戦跡の問題点を批判的に回覧することにあつたようだ。ガマ（自然洞窟）の案内を中心に据えた南部戦跡の「裏通り」が開拓されるのは、70年代半ば以降であった。さらに、戦跡の「裏通り」が、本土修学旅行生の平和学習の場として本格

的に活用され、「平和ガイド」の活動の舞台となるのは、80年代以降である。

最初に、南部戦跡の「表通り」の問題を公に投げかけたのは、歴教協の中心メンバーでもあった安仁屋政昭であった。安仁屋は、74年3月に「戦跡と玉泉洞めぐり」の観光バスに乗った体験を元に、「観光バスに乗った!」を書いた。そこで、以下の3つの問題点を指摘している。

第一に、「沖縄戦を祖国防衛戦争であったとして話を展開していること」。第二に「県民の犠牲を〈殉国の美談〉にしたてあげるような説明ぶり」。第三に「戦跡での話の大部分が軍人中心であること」、つまり、『県史』に描かれたような「日本軍による食糧強奪、避難壕からの追い出し、スパイ容疑による拷問と虐殺、自決の強要、飢え死に」などによる「沖縄県民の屈辱にみちた死にざま」がほとんど語られていないことが問題とされた [安仁屋 1974b : 33]。

端的に言えば、『県史』以前の沖縄戦記録の問題点と同様、その語りが「沖縄戦の実相」に触れていないがゆえに、批判されたのである。安仁屋は、同年、「戦後史と沖縄戦体験」という座談会において、一般住民の戦争体験を「ネグレクト」してきた沖縄戦記録について言及し、そのような「戦記を下敷きにして、観光ガイドの基本ができあがっているのではないか」と述べている [安仁屋他 1974 : 5-6]。観光ガイドによる沖縄戦の語り、牛島と長の自決を山場に据えて展開する「軍記物語」として構成されていたのは、前節で見た通りである。

その後、当大会に参加した教師・研究者が沖縄を訪れる度に、案内役を務めた沖縄側の教師・研究者に、戦跡・基地の案内が依頼されるようになった。

しかし、戦跡の「表通り」には、「戦跡らしい戦跡」「真の戦跡」は、ほとんど残っていなかった。大城が「場所が悪い」と同情したように、バスガイドが、「沖縄戦の実相」を語るができないのも、その「皇軍中心」のコース設定の限界であった。その「表通り」には、「沖縄戦を

正しく伝えようにも語るべき素材が乏しすぎ」 [大城 1979 : 78]、「観光地化」され「商業化」された「戦跡」しか残っていなかったからである。それでは、どのような場所を巡れば、「沖縄戦の実相」に触れられ、それについて語ることができるのか、研究者たちの模索が始まった。

やがて、『県史』編纂に携わった沖縄戦研究者によって、新たな戦跡・基地巡りのコースが、少しずつ整えられていった。それはまさに、琉球政府、そして沖縄県の観光施策に則り、かつ慰霊巡拝団を中心とした観光客のニーズを満たそうとした、オーセンティックな戦跡観光の「表通り」に対するアンチテーゼとなるものであった。そして、その戦跡の「裏通り」の中心に配置されたのが、「ガマ」(自然洞窟)であった。

(2) 戦跡としての「ガマ」の再発見

ガマは、沖縄の方言で、鍾乳洞や窟みなどの自然洞窟を意味し、沖縄本島南部を主として至るところに散在している。戦中そこは、その堅牢さゆえ、住民の避難壕、日本軍による陣地壕、野戦病院などとして様々に活用された。そして、戦線が南下するにつれ、軍民が雑居したガマの中で、日本軍による優先的使用、食糧の略奪、幼児虐殺、スパイ容疑による処刑など数多の惨劇が展開された。戦後、ガマは、周辺住民のゴミ捨て場と化し、落盤や不発弾などの危険に晒される場所として、あるいは陰惨な「戦争の記憶」が封印された場として、忌避され続けてきた。

今では、「ガマ」といえば、「沖縄戦」を直截に想起させるものとなっているが、70年代当時、ガマの存在は、忘却されつつあった。それどころか、「壕」や「洞窟」という呼び方の方が一般的であり、「ガマ」という名称さえ使われることが少なかったのである。現在、「沖縄戦追体験」の場として、年間約15万人の修学旅行生が訪れるアブチラガマ(糸数壕)でさえ、当時は、その名前すら忘却の一途にあり、「地元の人たちにきいてもはつきりしない。それどころか場所さえ

知らない人が少なくない」場所となっていたという [大城：1977b]。

大城将保は、1977年11月27日の『琉球新報』の記事、「戦跡めぐり・序」において、「現在の南部戦跡にはもはや戦跡らしい戦跡はのこっていない」という声を紹介し、それに対して、「戦跡は残ってないのではなくて埋もれている」と反論している。そこで大城は、ガマを例に挙げ、その実相を次のようにレポートした。「洞窟の中には今なお遺品や不発弾や遺骨の断片などが石ころに埋もれた状態になっていて、そこに立っていると地底から死者たちのうめき声がわきおこってくるような感さえ催す」 [大城 1977a]

ここに、「戦跡としてのガマ」が再発見された。数々の遺品、遺骨が散在するガマという場は、まさに、「沖縄戦の実相」を雄弁に語ってくれる「沖縄戦の語り部」であった。ガマという有無を言わさぬ戦争の「語り部」を巡って、沖縄戦記録／継承運動は、急速に展開していくこととなる。

最も初期の「裏通り」の「戦跡めぐり」は、1970年代半ば、反戦平和教育の一環として、沖縄の教員たちの手によって企画された。1974年6月2日に高教組南部支部によって、「平和を守り、民主主義を築き、真実を貫く国民教育の確立」を目指して、「第1回 戦跡めぐり」が行われた（その時のガイドを務めたのが、安仁屋政昭と大城将保である）。そのコースの中に、上述のアプチラガマは含まれていないが（当時のアプチラガマは、大量のゴミに埋もれ、入塚するのも困難だった）、「新城の塚」（ガラビ塚）などの名前が見られる [高教組那覇支部：1974]。

やがて、ガマは、主に地元の高校生を対象とした平和教育の流れの中で、「戦争体験継承の場」「沖縄戦追体験の場」として、位置付けられていくようになっていった¹⁷。

ガマの中に入った者は、泥だらけになりながら、遺品や遺骨の間を掻き分け踏み分け、身をもって当時の惨状を想像した。しかし、研究者たちが、そこを「沖縄戦追体験の場」と呼んだのは、何も「遺骨・遺品」の存在ゆえだけでは

なかった。何よりも、人々に大きな衝撃を与えたのは、その「漆黒の闇闇」であった。

石原昌家は、当時を振り返って、「洞窟（ガマ）を戦争遺跡という観点で、証言に基づいて案内してその闇闇を体験させたらまさしくその闇は当時のままであり、遺物も相当残存しているので計り知れないほどの衝撃を与えることになった」と述べている [石原 1986：264-5]。ガマに足を踏み入れた者は、その中で「漆黒の闇闇」を体験することによって、沖縄戦当時の闇闇、ひいては戦場の惨状にまで接続されたのである。

やがて、ガマの「闇闇の教育力」に注目が寄せられるようになり、沖縄の教育者たちは、平和学習の場に「闇闇体験」を導入するようになった¹⁸。

1982年に発表された吉浜忍と山川宗秀の「生き方にかかわる沖縄戦学習を」は、その教育力について言及した最も初期の報告のひとつである。吉浜らが案内役を務める「戦跡めぐり」に参加した生徒たちは、闇の中で、戦争当時に「タイムスリップ」し、「壕の上を戦車が地響きをたてて通る音、砲弾の炸裂音、何よりも闇と沈黙の恐怖」を「追体験」した [吉浜・山川 1982：92]。その時、ガマの「漆黒の闇」を体験した高校生の作文の一部を引用しよう。

「ライトを消しなさい。」その一言で僕の戦跡巡りは始まった。ここは、ある壕のなか、真っ暗だ。墨をこぼしたような本当の闇が周りいっぱい広がる。(略) そこには、あまりにも、むごたらしい37年前があった。 [吉浜・山川 1982：94-5]

そして、そのような時空を超えた「本当の闇」の中で、「戦跡ガイド」によって¹⁹、場に固有の記憶が語られたのである。バスガイドが、シナリオをそのガイドの拠り所としたのに対して、戦跡ガイドには、そのようなマニュアルはなかった。戦跡ガイドが依拠するのは、沖縄戦記

録運動によって、大量に収集されつつあった沖縄住民の証言であり、そのあまりにも陰惨な戦場の記憶を語り継ごうという思いに導かれてのことであった²⁰。テキスト化されることによって、「非場所の記録」として遊離した沖縄戦の記憶は、再度その場所へと再帰させられた。ガマという沖縄戦の記憶が宿る場を再発見したことによって、「記録」化されることで血を抜き取られた沖縄住民の戦場の記憶は、場に固有の「語り」として甦ったのであった。

おわりに

草創期の沖縄戦記録／継承運動が打ち破ろうとしたものは、「沖縄戦の定型化された語り」であった。その「定型化された語り」とは、屋嘉比取がいうように、「沖縄戦が日本の国土防衛のために崇高なる犠牲的精神を払った沖縄住民の闘いとして語られ、記憶され」るべきであるとする日本国民の「公共の記憶」そのものであった [屋嘉比 2000:116]。沖縄戦記録／継承運動とは、そのような日本国民の「公共の記憶」(パブリック・メモリー)に抗して、沖縄戦体験者の不定形の語りに輪郭を与え、「沖縄人」の「公共の記憶」として再定義しようとする試みであったと理解することができるだろう。

「祖国復帰」を間近に控えた反戦平和運動の気運の中で、「沖縄戦における日本軍の残虐行為」が執拗に告発された。ヨネヤマ・リサは、ヒロシマの想起を巡る政治について論じた“Hiroshima Traces”において、「周縁化された社会的位置にいる者」が、自らを「エンパワーメント」するためには、「歴史的な事実と過去の経験を神聖なる客観的な現実として利用可能なものにする」ことが肝要であると論じている [Yoneyama 1999:33]。まさに、沖縄住民に対する「日本軍の残虐行為」という、その「神聖なる客観的な現実」こそが、「醜い日本人」に対峙する形で「沖縄人」を分節化することに寄与した。富山一郎がいうように、まさに、「想起

するということは新たな〈分節化〉を引き起こす政治的な営み」なのである [富山 1995:136]。

しかし、90年代以降、「日本人」とは、「沖縄人」とは、誰なのかという議論が喧しい (富山一郎『近代日本社会と「沖縄人」』1990、富山一郎『戦場の記憶』1995、小熊英二『〈日本人〉の境界』1998、など)。それと共に、「沖縄人」という語りの位置 (主体) 自体が、問題にされるようになってきた。様々な点で「本土並み」と化した政治・社会状況下で、「沖縄人」とは一体誰なのか。そして、沖縄戦の記憶もまた、何のために、どのようにして、どのような位置から、想起されるべきなのか、新たな問い直しを迫られるようになった。主体が、呼び掛けられることにより立ち上がるものとしたら、沖縄戦の記憶に呼び掛けられた主体が、かつての「沖縄人」だったということができよう。しかし、沖縄戦を想起することによって縁取られた「沖縄人」の輪郭は、再び茫漠とした様相を呈し始めて、久しい。

【謝辞】

この論考に対して、沖縄平和ネットワーク代表世話人の大城将保さん、同事務局長の川満昭広さん、同会員の三浦文子さんから、数々の重要かつ適切なコメントをいただきました。エール大学人類学部博士課程のアリソン・アレクシーさんには、英文要旨を修正していただきました。お名前を出すことはできませんが、YバスのZさんには、貴重な資料を提供していただきました。以上の諸氏に、厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 安仁屋政昭. 1974a 「庶民の戦争体験記録について」『沖縄県史』第10巻, 沖縄県教育委員会, 1096-1102.
- 安仁屋政昭. 1974b 「観光バスに乗った!」『沖縄思潮』3, 沖縄思潮編集委員会, 32-34.
- 安仁屋政昭編. 1983 『沖縄戦再体験』平和文化.
- 安仁屋政昭. 1988 「沖縄戦を記録する」『事実

- の検証とオーラル・ヒストリー』青木書店、56-92.
- 安仁屋政昭他. 1974「戦後史と沖縄戦体験—沖縄の戦争体験をどう生かすか—」『沖縄思潮』4, 沖縄思潮編集委員会, 4-18.
- 米国陸軍省編. 1968『日米最後の戦闘: 沖縄戦死闘の90日』(外間正四郎訳), サイマル出版会.
- 防衛庁防衛研修所戦史室. 1968『沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社.
- 古川成美. 1947『沖縄の最後』中央社.
- 古川成美. 1949『死生の門: 沖縄戦秘録』中央社.
- ひめゆり平和祈念資料館. 2000『ひめゆりの戦後』ひめゆり平和祈念資料館.
- 北海タイムス. 1983「沖縄北霊碑秘話18」『北海タイムス』1983年7月14日.
- 石原昌家. 1986「沖縄戦体験記録運動の展開と継承」『沖縄文化研究』12, 法政大学沖縄文化研究所, 239-266.
- 糸数慶子(講演). 1998「〈平和ガイド〉にかける思い 沖縄戦体験を引き継いで」『理論戦線』56, 実践社, 10-13.
- 金城和彦編. 1959『みんなみの巖のはてに』光文社.
- 金城和彦編. 1966『愛と鮮血の記録』全貌社.
- 高教組那覇支部. 1974『第1回戦跡めぐり』高教組那覇支部.
- 宮城聡. 1971「解題」『沖縄県史』第9巻(沖縄戦記録1), 琉球政府, 1-80.
- 宮川嘉明. 1972「沖縄大会参加記 北海道から沖縄へ」『歴史地理教育』202, 歴史教育者協議会, 74-76.
- 仲程昌徳. 1982『沖縄の戦記』朝日選書.
- 名嘉正八郎. 1971「編集後記」『沖縄県史』第9巻, 琉球政府, 1070-1.
- 名嘉正八郎・谷川健一. 1971a『沖縄の証言(上)』中公新書.
- 名嘉正八郎・谷川健一. 1971b『沖縄の証言(下)』中公新書.
- 仲宗根政善編著. 1951『沖縄の悲劇: 姫百合の塔をめぐる人々の手記』華頂書房.
- 中山良彦. 1977「“沖縄戦”をどう展示するか」『青い海』特集=33年目の沖縄戦と集団自決, 62, 青い海出版社, 105-111.
- 小熊英二. 1998『〈日本人〉の境界: 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社.
- 岡本太郎. 1961『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』中央公論社.
- 沖縄県遺族連合会. 1982『還らぬ人とともに』沖縄県遺族連合会.
- 沖縄観光協会. 1957『新沖縄案内 1957年度版』沖縄観光協会.
- 沖縄観光協会. 1963『沖縄観光案内』沖縄観光協会.
- 沖縄観光協会. 1964『沖縄観光十周年史』沖縄観光協会.
- 沖縄県教育委員会. 1974『沖縄県史』第10巻各論編9(『沖縄戦記録2』), 沖縄県教育委員会.
- 沖縄県生活福祉部援護課. 1983『平和への証言: 沖縄県立平和祈念資料館ガイドブック』沖縄県生活福祉部援護課.
- 沖縄県生活福祉部援護課. 1998『沖縄の慰霊塔・碑』沖縄県.
- 沖縄県戦没者慰霊奉賛会. 1990『会報 平成元年度』沖縄県戦没者慰霊奉賛会.
- 沖縄協会. 1973『南援17年のあゆみ』財団法人沖縄協会.
- 沖縄タイムス社編. 1950『鉄の暴風: 現地人による沖縄戦記』沖縄タイムス.
- 島津与志(=大城将保). 1974a「沖縄戦はどう書かれたか—戦争伝説を生みだす土壌—」『沖縄思潮』4, 沖縄思潮編集委員会, 35-53.
- 大城将保. 1974b「戦争体験を平和思想の核となしうるか(上)」『琉球新報』1974年6月25日.
- 大城将保. 1977a「戦跡めぐり・序」『沖縄タイムス』1977年11月27日.
- 大城将保. 1977b「戦跡めぐり・糸数塚」『沖縄タイムス』1977年12月25日.
- 大城将保. 1979「戦争体験は継承しうるか」『新沖縄文学』43, 沖縄タイムス社, 74-85.

- 嶋津与志 (=大城将保). 1983 (1997) 『沖繩戦を考える』ひるぎ社.
- 大城将保. 1985a 「沖繩戦の現在」『青い海』142, 青い海出版社, 36-41.
- 大城将保. 1985b 『沖繩戦 民衆の眼でとらえる「戦争」』高文研.
- 大城将保. 1997 「沖繩戦の跡をたどる」『観光コースでない沖繩』高文研, 55-167.
- 大城将保. 2002 「沖繩戦の真実をめぐって—皇軍史観と民衆史観の確執」『争点・沖繩戦の記憶』社会評論社.
- 大田昌秀・外間守善共編. 1953 『沖繩健児隊』日本出版協同.
- 歴史教育者協議会編 1972a 『歴史地理教育』198, 歴史教育者協議会.
- 歴史教育者協議会編 1972b 『歴史地理教育』202, 歴史教育者協議会.
- 歴史教育者協議会編 1972c 『歴史地理教育』203, 歴史教育者協議会.
- 琉球政府. 1971 『沖繩県史』第9巻各論編8 (『沖繩戦記録1』), 琉球政府.
- 琉球新報. 1957 「話の卵 パス・ガイド」『琉球新報』1957年6月23日.
- 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会. 1989 『千鳥ヶ淵戦没者墓苑創建三十年史』千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会.
- 富山一郎. 1990 『近代日本社会と「沖繩人」: 「日本人」になるということ』日本経済評論社.
- 富山一郎. 1995 『戦場の記憶』日本経済評論社.
- 屋嘉比取. 2000 「ガマが想起する沖繩戦の記憶」『現代思想』28 (7), 青土社, 114-125.
- 靖国神社国営化反対沖繩キリスト者連絡会. 1983 『戦争賛美に異議あり! —沖繩における慰霊塔碑文調査報告—』靖国神社国営化反対沖繩キリスト者連絡会.
- Yoneyama, Lisa. 1999 *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, Berkeley: University of California Press.
- 吉浜忍・山川宗秀. 1982 「生き方にかかわる沖繩戦学習を」『歴史地理教育』345, 歴史教育者協議会, 88-95.

【注】

- 『那覇市史』の『戦時記録』は、市民から公募した戦時体験記を中心に編纂されている。『県史』の『沖繩戦記録』の手法は、80年代以後の市町村史で幅広く取り入れられていくことになるのだが、この時期では、まだその実験的手法に懐疑の声が強かったということであろう。
- その顔末は、『北海タイムス』の特集「沖繩北霊碑秘話」に詳しい(1983年6月24日-7月21日)。
- なぜ、北海道の慰霊団が、他都道府県に遙かに先駆けて企画され、慰霊碑の建立が切望されたのかについては一抹の説明を必要としよう。沖繩戦には、北海道出身者が多数参戦し、その殆どが戦死した。北霊碑には、10850人の北海道出身沖繩戦戦死者が合祀されている(概数は、約15000人という説もある)。この数は、次いで戦死者が多かった東京都の「東京の塔」の合祀者数(6500人)を遙かに上回る。戦死者数が、3000人を超える都道府県は、北海道と東京都と兵庫県のみであって、ほとんどの県の戦死者数は、2000人に満たない。その中で、北海道の戦死者が際立っていることから鑑みれば、その特異性も推察できよう。
- 特殊法人南方同胞援護会(昭和31年~47年5月)は、沖繩が本土に復帰するまで、各種の援護活動を行った。1972年9月、内閣府所管の公益法人「沖繩協会」に改組。
- 1957年、靖国神社奉賛会沖繩地方本部として発足した。現在の沖繩県戦没者慰霊奉賛会。
- 黎明の塔、健児の塔を始めとして、各都道府県の慰霊塔の多くがその管理下にある。
- 60年代はまた、本土復帰に向けて、沖繩遺族連合会の本土系列化が進行しつつある時期でもあった。沖繩遺族連合会が、日本遺族会に取り込まれていく過程については、今後の

研究の課題としたい。

- 8 中央納骨所は、1957年、那覇市識名の霊苑内の一角に、日本政府の委託を受けた琉球政府により建設された。
- 9 国立の戦没者墓苑に納められた「無名戦没者」は、国家の繁栄・平和の「礎」として祀られ、例年その場で催される慰霊祭では、死者の声が生者によって表象・代弁される。筆者は、そのような国家による「戦没者」の慰霊祭（追悼式）を始め、戦死者遺族・戦友による慰霊祭等のフィールドワークを各所で行っている。そこでどのように「戦没者」が、表象・代弁されているのか、調査結果を鋭意まとめていく所存である。
- 10 管見では、『沖繩観光案内』というタイトルの本は、1963年版の『沖繩観光案内』以前に発見することができなかった。『新沖繩案内』と『沖繩観光案内』は、共に沖繩観光協会から刊行されている。
- 11 1970年に、旧海軍司令部壕（豊見城村）が復元され、その内部が公開されるようになってから、戦跡観光コースに海軍壕の見学が加えられた。公開開始当時の壕内には、「海ゆかば」が流れ、軍関係の遺品が多数陳列され、そこで自決を遂げた海軍司令官大田実少将の蠟人形や辞世の歌が飾られていた。
- 12 沖繩での上映は、それより数ヶ月遅れて、同年夏。1957年3月には、佐賀県で行われた観光博覧会の琉球館に実物大のひめゆりの塔が展示されるほど、「殉国の乙女たち」の物語は広く行き渡っていた [ひめゆり平和祈念資料館 2000]。
- 13 1959年に、同塔を訪れた岡本太郎は、次のように書き残している。「その軍部を象徴する暗いエゴイズム。——私は嫌悪に戦慄する。／旧日本軍隊の救いがたい愚劣さ、非人間性、その恥と屈辱がここにコンデンスされている。これはもっともっと叫ばれてよい問題だ」[岡本 1961：18]
- 14 この資料は、1971年当時、YバスにてバスガイドをしていたZ氏より提供していただいた。論文への引用を快諾して下さったが、事情により、ここに名前を出すことはできない。この場を借りて深く感謝の意を表したい。
- 15 実際には、沖繩戦は、牛島と長の切腹をもってしても終わらなかった。牛島が自決の数日前に発した「最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし」との最後の軍司令官命令によって、あらゆる降伏の可能性が途絶されていたからである。司令官と参謀長の死によって、戦闘を終結させる者はいなくなり、無益に戦死者の数を積み重ねることとなった。
- 16 糸数慶子ホームページより
[<http://www5a.biglobe.ne.jp/~keiko-i/>]
- 17 沖繩における平和教育が、本土からの修学旅行生を対象に行われるようになるのは、80年代以降である。
- 18 現在においても、ガマを案内する「平和ガイド」のほとんどが、修学旅行生に懐中電灯を消させて、「漆黒の暗闇」を体験させる。その「暗闇体験」は、ガマ体験のメインイベントとして、中心に据えられている。
- 19 現在では、戦跡や基地を案内する人々は、「平和ガイド」と呼ばれている。当時、その通称は存在しなかったが、ここでは便宜的に「戦跡ガイド」と総称した。
- 20 その点、彼らは、マニュアルを読み上げるだけの単なる「ガイド」からは、あまりに逸脱していた。それは、マニュアルに完全に依存することによって成り立つ、バスガイドの実践の対極として立ち上げられたのである。80年代後半に運動当事者たちが自らの活動を「平和ガイド」として定義したことの必然は、すでに用意されていたのである。

[2004年3月31日受理]

Antagonisms of Memory: Local Retellings of the Battle of Okinawa

Tsuyoshi Kitamura*

Abstract

In this paper, I analyze the politics of memory concerning the Battle of Okinawa. Beginning in the 1970s, memories of this battle have been politicized through Okinawan activism organized in a development known as the "movement to remember the heritage of the Battle of Okinawa [Okinawa-sen kiroku/keishiou undou] ." In the first wave of this movement, Okinawan intellectuals critically reexamined conventional records and narratives that typically described the war only from a military perspective. To represent the battle from the viewpoint of the Okinawan populace, these activists attempted to rewrite the accepted narrative of the battle. This project became more popularly recognized and successful after the publication of two volumes entitled *The Record of the Battle of Okinawa* in *The History of Okinawa Prefecture* . Compiled by the activists, these texts presented a revisionist viewpoint of the battle and, since their publication, similar perspectives have become more accepted. Further, Okinawan intellectuals challenged the way the battle was being presented in narratives performed by bus tour guides around sites typically visited by tourists. In contrast, these activists advocated less well-known sites from which they could present the standpoint of the populace anew. To this end, in the mid-1970s, the natural caves known as the "Gama" were defined as the archetypal "back-street" location. Intellectuals and activists viewed these caves as places where Okinawan popular memory dwelled in darkness during and after the battle. Thus, the politics of memory of the Battle of Okinawa revolved around the antagonism between two ways of "remembering:" the perspectives offered by mainstream tour-guides and those presented as the voices of the Okinawan populace.

Key words : Battle of Okinawa, memory, remembering, war tourism, tour guide, war memorial, battle sites, Gama

*Graduate School of Human Sciences, Waseda University